
王子と雌鹿

海城ありあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と雌鹿

【Zコード】

Z5377Z

【作者名】

海城ありあ

【あらすじ】

ある王国のあるお城で王子の誕生日パーティーが行われています。
そこで王妃である母が彼にいうのです『明日の舞踏会で花嫁を見つ
けなさい』と。まだ自由の身でいたい彼は物思いにふけりながら友
人達と鹿狩りへ出かけるのでした。

1・お城の庭園

さわぱりとした青空の下ある大きなお城の庭園で大きなパーティーが行われていた。そのパーティーとは19歳になつた第一王子の誕生日を祝つものであつた。そのためかお金持ちの貴族が目立つが、珍しく城下町にも友好が多い王子であつたので、村娘や商人などいろいろな身分の者もたくさん訪れていた。

その様子を椅子に座つて眺めていた王子は、ため息をついた。

先ほど、この国の王妃である母に言られた事について考えていたのである。

『クリーフス、楽しんでいますか』

村娘達が楽しそうに踊つているのをボーっと眺めていると、どこからともなく母がやってきてそう声をかけてきた。なんともいえぬ笑みを浮かべる母に対してクリーフスは怪訝な瞳を向ける。こういう笑みを浮かべる母は、いつだって何か企んでいると知つていてるからだ。

『ええ、いつも以上に楽し—ですな』

クリーフスが上品ににっこりと笑うのをみると母は満足したよう、元もつていた扇を上品に口元にあてる。
そして満面の笑みでいつまでもだった。

『お前もいい歳になつたのだから、明日の舞踏会で花嫁を選びなさい』

その瞬間、笑みを浮かべていた顔が凍りついたのを覚えてい。母はそういうクリーフスの反応にも満足したように笑い、有無を言わせぬうちに立ち去った。

さっきの事を鮮明に思い出してクリーフスは少し顔をしかめる。どうしたものか、と頭を抱えた。

母の言いたいことは分かるのだが、まだ結婚とやらをしたくなかつた。この国では、早々と結婚するものがいるが、結婚をすると自由でいられる時間が少なくなると聞くし、クリーフスはまだ自由に遊んで居たかったのだ。

良い回避方法も思いつかないので、クリーフスは少し歩くことにした。椅子から立つと近衛兵がこちらを窺っているのを感じたので、護衛はいらないと首を横に振る。少し一人になりたかった。母からそうなることを見越した命令が出されているのか、護衛が付いてくる気配はなかつた。

「クリーフス……」

自室に戻ると城の中を歩いていると、後ろから聞きなれた声がしたので立ち止まつた。振り向くとそこにいたのは、3人の若い男。いずれも幼い頃からなじみのある友人たちだ。

「やあ、今日は僕のために来て貰てありがと」

そう言って笑みを浮かべると、3人は少し驚いたように目をまるく

してお互いに顔を見合させた。クリーフスはそんな友人達の様子に首をかしげる。何か変な事をしたのだろうか、と考えていると不意に右肩を軽く叩かれた。

「まあ。クリーフスらしいと言つちゃあ、らしいよな」

「は……？」

苦笑いする友人にますますわけが分からぬ。

「ほんと、ほんと。嫌なだけにさー」

「俺たちにまでそんな顔みせないでくださいよ」

「ごめん?」

わけが分からず謝るクリーフスを見て友人達は、第一王子としてのプライドはないのかやら相変わらず変わった奴だなどと笑う。3人に詳しく話を聞くと、どうやら結婚の話のことらしかった。母との話を近くで聞いていたらしく、それを心配して3人は追いかけてきたのだと。

「あの時のクリーフスの青ざめっぷりといつたら、倒れるんじゃないかって思つたぜ?」

「そうそう! 嫌味なくらいに綺麗な笑顔が凍りついた瞬間なんてお腹が痛くなりましたよ!」

「あのあとはずっとその変な笑顔張り付けたまんまで不気味だつたなー。まさか僕達までその変な顔を見せられるとは思つてなかつたけど」

相当な言われようにもツッとしたクリーフスは腕を組んで3人を睨んだ。

「仕方ないだろ、考えてたんだから」

何を考えていたんだ？ と楽しそうに笑みを浮かべる3人にクリーフスはため息をついた。

「花嫁探し舞踏会の回避方法を考えていた。お前達も考えててくれよ」

クリーフスは幼いころから自分の立場をあまり考えずに行動することが多い。普通の貴族ならしない様なことをしてみたり空飛もないことをして人々を驚かせる。例えば10歳の時には衛兵の監視の目を抜け出して城下町へこっそり遊びに行き、あるうごと/orが庶民の友人をつくつて一日中遊んでいたりした。だからこそ身分という壁を越えて多くの人々と渡り合えることができるのだろう。まあ、良く言えばだが。悪く言えば前後の事を考えない自己中で、その上空気読めない奴だった。と3人の友人達はそれぞれ思いつつなんだかんだ王子の言つことに頷いた。

彼らはもともとそのつもりでクリーフスを追いかけて来たのだ。

「じゃ、気晴らしに森で鹿狩りでもしながら考えようか」

3人の友人の内の1人がそういうとクリーフスは笑みを浮かべた。

1・お城の庭園（後書き）

文章力といつものぎ亞無ですいません。

2・湖のほとり

太陽が低くなり森の中が薄暗くなってきた頃、珍しく鹿狩りに夢中になっていたクリーフスはいつの間にか友人達とはぐれていた。鹿狩りというのは貴族達の間で流行っているお遊びで、一種の嗜みであつた。無暗に動物を痛めつけることに対するクリーフスはあまり良く思っていないが、今は何も考えたくなかつたので鹿を追いかけ事に夢中になってしまったのだ。辺りを見回すと、どうやら大きな湖まで来てしまつたようだ。

友人達は帰つただろうか、などと考えていると何処からか木の葉が揺れる音がした。驚いてそちらをみると、鹿の群れが湖のほとりで水をのんだり、毛づくろいしたり、リラックスしていた。何故かそれが幻想的に見えて思わず魅入るクリーフス。しばらく鹿達の様子を観察していると、あることに気がついた。

鹿達は、すべて雌鹿だったのだ。

そのことに気づいて首をかしげ近づこうとしたその瞬間、クリーフスを拒むように辺りに淡い光が漂い始める。そして湖に月の光が差し込んだ時、それは起こつた。

なんと、湖のほとりにいた鹿達が全て人間へと変化したのだ。

「つー？」

驚きに目を見開いたクリーフスは思はず足を前に踏み出し、地面に落ちていた小枝を踏んでしまつた。

静かな森の中に響く小さな音に、雌鹿だった人間達はクリーフスの

方を一斉に見た。そして彼を田んごとみると同時に彼女達の瞳に焦りと不安が浮かび上がった。

「あ、あの

クリーフスが一步近づくと、座っていた彼女達は慌てて立ち上がり後ずさる。月の光の下でみた彼女達は、まだ年若いように思えた。ざわざわと小声で話す彼女達を見て、怯えさせると分かつていてもクリーフス的好奇心は止まらなかつた。ためらいのない足取りに、彼女達は凍つたように固まつた。

「とまりなさい」

凛とした、高くもなく低くもない声が聞こえた。そちらを見ると、彼女達を守るかのように立ちはだかる少女がいた。少女の髪は月の光と同じ金色に輝いている。服装はシンプルな白いワンピースだが、彼女自身から上品ないでたちをかんじるので、どこかの伯爵令嬢と言われても納得してしまいそうだ。そんなことを考えていると少女は先ほどよりも声を低くして、うなるように去るよつに言った。クリーフスは慌てて手に持つていた弓を地面に放り投げ、手を振つて首を横に振つた。

「まつて。君達を捕つて食つたりしないよ！　ただ、どうして君達が雌鹿から人間に変わつたのか驚いているんだ！　僕の名前はクリーフスっていうんだけど」

すると少女は悔しそうに顔を歪めて横を向いた。

「ではクリーフスと仰る御方よ。いいで見たことは忘れてください。

そして、誰にも口外しないで」

「君達は、人間なのだよね？」

「……っ」

うつむいた金髪の少女にゆっくりと近づくクリーフスに、少女の周りにいた人々は警戒の目を投げかけていたが、そんな警戒さえも無視して少女に近づくことをやめなかつた。どうしてか、彼女に魅かれてしまつたのだ。手を伸ばせば届く距離、文字どうり彼女に手を伸ばそうとすると金髪の少女はクリーフスを困つたように見上げた。それを見て思わず伸ばした手を止める。少女はとても美しい人であつた。胸が高鳴るのをどこか他人事のように感じながら、じつと彼女の揺れる瞳を覗きこんだ。

「君は」

少女はクリーフスの瞳をジッと見つめ返し、どこか覚悟を決めたようにはざかに額き口を開けた。

「私の名はスフィール。あなたの言うように私達は人間です。私達は1年前、悪い魔法使いの怒りをかつて姿を変えられてしまつたのです。それからは彼の魔法のせいでの日は雌鹿としてすごすことになつてしましました。でも、夜に月の光を浴びると人間に戻ることができるので……」

日は雌鹿、夜は人間。と淡々と話す美しいスフィールの手をとり強く握つた。すると彼女は驚いたように目を見開き、みるみるうちに顔を赤く染めると目をそらした。そんな彼女の反応に嬉しく、むずむずするよつた感覚を覚えながらクリーフスは意気込んだ。

「君達を元のすがたに戻す方法はないのかい？ 協力したいんだ！」

！

「そ、それは……」

スフィールは眉をひそめながら自分達の事を見守っていた人々に目を向けると、彼女達はみなどこか哀しそうに頷いた。スフィールも軽く頷いて、またクリーフスを見上げた。

「では、わたしたちがこのよになつたわけを話しましょ。まずはそれからです」

クリーフスが湖近くの切り株に座つたのをみて、スフィールは話しだした。

「私は ある小さな王国の姫でした」

それは暑い日の夜、王女の誕生日を祝つての舞踏会がひらかれていた。小さな王国であつたので小規模の舞踏会であつたが、その分知人ばかりがあつまるこの日をスフィールは楽しみにしていた。

「スフィール」

バルコニーで休憩をしていると後ろから声をかけられた。そちらを振り向くと温厚そうな笑みを浮かべた父が立っていた。スフィールが笑い返すと父は頷きながら歩み寄る。月の光のように輝く金の髪を結いあげ、純白のドレスを着飾つたこの美しい姫はどこからどう見ても妖精のそれであつた。そんな娘を眩しそうに見つめながら優雅な動作で手をとり、その小さな手の甲に軽く口づけた。

「誕生日おめでとう、スフィール姫」

「あ、ありがとうございます。お父様」

少し顔を赤らめながら、慌てて両手を背中に隠す。あまり異性と触れ合つたことのないスフィールには、たとえ父であつてもなんだか小恥ずかしかったのだ。ニコニコと笑う確信犯な父を少し睨むと、「ごめん」と謝りスフィールの頭をなでる。

「頭をなでるのはお止めください。髪が崩れます!」

「ふふ、お前ももう16歳になったのだな」

子ども扱いをされたことにむつとして、父から3歩離れる。大きくなったなあと、額ぐマイペースないつもの父にため息をついた。この国の王である父には何を言つても無駄なことは分かつていたので

開けかけた口を閉じた。そうしたのは、バルコニーに出て来た人影が見えたからでもある。

「おやおや、仲が良さそうでなによりです」

「やあ、ジュイネア。今夜は娘のためにわざわざありがとう」「……こんばんは、ジュイネア様」

ジュイネアとよばれたこの人物は、いつも全身黒ずくめの衣装を着こなす変わった人であった。父と同じような威厳を醸し出す彼にスフィールは苦手意識を抱いていた。侍女たちにも、いつの間にか国王に近づきいつのまにか取り入った魔術使いで、そしていつも姫に嫌な視線を送る、と邪険にされていたりする。侍女たちの言つてることは間違つていなくて、スフィール自身もジュイネアがねつとりとした視線を投げかけてくるのをしつかりと感じていた。現に今も、そういう日で見られている。

「お父様、少し気分がすぐれないで部屋へ戻ります」

「え？ ああ、わかつた。きをつけなさい」

どうしてもその視線に耐えられなかつたので、スフィールは逃げるよつにバルコニーから自室へ戻つた。

肩を激しく上下させて、真っ赤な顔で部屋に入つて来たスフィールを見るなり侍女たちは驚いた顔をして駆け寄る。綺麗に結つた髪が少し乱れていた。何があつたのかは分からぬが、あの黒の魔術使い関係の事だろうと、そこにいた侍女達全員が思つた。

「姫さま、何があつたのですか？」

「別に何もなかつたけれど……わたしやつぱりあの人苦手」

ぐつたりとソファーに倒れこむスフィールに侍女たちはやつぱり、
という顔をする。その様子にスフィールが首をかしげると、侍女の
一人が口を開けた。

「……先ほど、こちらにもお見えになつたんですよ」

「姫さまはどこにいるのかつて。もちろん知らないと言いましたわ
「まず、未婚の女子の部屋にいきなり訪れるというのも普通じゃあ
りえませんし」

一人が話しかずと、まわりの侍女もたまらないという風に口早に話
しだす。

「絶対、姫さま狙いですわよね！！　の方だけは許せませんわ
「あのいやな目！　思い出しただけで虫唾が走ります！」

「姫さま、あのインチキ魔術使いには気をつけてくださいませ……！」

5人の侍女にすごい迫力で言われると、分かつたとしか頷けなか
つた。そんな姫の反応をみても、たまたたうつぶんが晴らし切れて
ないのかぐちぐちと黒の魔術使いの話を続けようとする。さすがに
これではだめだと思つたスフィールはソファーから立ちあがり、集
まる侍女たちの間に入る。

「わ、わかつたから。少し落ち着いて。私は大丈夫だから、ね？」

誰かに聞かたら私にとつてもまづい、と言うと彼女達も正氣を取り

戾したように頷いた。

「すいません姫さま、 出すぎた真似をしてしまって」「つづん、いいのよ。でもあなた達は焦りすぎよ。まだ何も起こつてないのだから彼を疑うのは良くないし、失礼だわ」

そうですね、とショーンとする侍女たちに思わず笑みがこぼれた。彼女達はスフィールと同じくらいの年齢が多く、まだ若い。スフィールには友人とよべるような人はいなかつたのだが、彼女達の明るい性格のおかげで寂しくはなかつた。

3・お詫せ（後書き）

長くなつてだったので、切りましたが続きます。

4・悪魔ジュイネア

「……でも、なにか起こつてからは遅いです」

部屋の扉を叩く音がしたのは侍女の一人がそう言ったのと同時だつた。スフィールは部屋の温度がいくらか下がったのを感じた。それは彼女達も同じようすこし怯えたような顔をしていたが、この中で一番年長の侍女が扉へと訪問者を確かめに行つた。

「つ……ジュイネアさま」

顔をこわばらせた年長の侍女の言葉を聞いた瞬間に入ってきた長身の男をみて、スフィールは背筋が凍るのを感じた。

「突然すまないね、だが姫が心配だつたのだ。具合はどうだい」

じつとりとした響きの声でスフィールに近づく。スフィールの頭の中で何かが警告を発しているのをどこか遠くで感じていた。

「大丈夫です。それより、いきなり姫である私の部屋に訪れるとはどういったご了見で？」

「そんなんに構えないでくださいな、私は貴女と少々話がしたかっただけなのだから」

そう言って、にこりと笑う黒の魔術使いをみてスフィールは違和感をかんじた。いつもの嫌な視線を感じるので。いたつて普通の紳士のようないでたちに、自分達は何か勘違いをしていたんじゃないかと思わせた。そう思つたのは侍女たちも同じようで、どこか警戒ゆるんだ瞳で彼を観察していた。スフィールは頷いて、ジュイネア

を椅子に座るように促した。

「それで、話というのは」

侍女が、飲み物をもつてきたのを見はからつてスフィールはジュイネアを窺う。ジュイネアは優美な動作で豪華な机の上に肘をつき、両手をくんでその上に顎を乗せた。

「あなたに私の妻になつていただきたいのです」

「……っそれは」

「もう国王には話をしてみたのですが、貴女の了承がなければ受けられないと言われましてね。こうして伺つたわけなのです」

いたつて紳士な優しげなその瞳にスフィールはどうすればよいのか分からなくなつた。今まで怖かつた人物がいきなり優しく自分を見つめるのだ。いつものような嫌な視線を送つてくるようであれば、なんとかできると思つていたのだが。なんだか、考える力さえなくなってきたように感じた。頭にモヤがかかつたようにクラクラとする。なんだか眠い、と目を擦つてまたジュイネアを見ると同時に1人の侍女の叫び声がした。驚いてそちらをみると彼女はジュイネアに水をかけようとして、年長の侍女に止められている所であった。スフィールは思わずたちあがる。

「何をしているのですか！？」

スフィールが叫んでも彼女には届いていないようで、顔を真つ赤にそめてジュイネアを指さしていた。

「外道な悪魔め！！ 姫さまに取り入ろうなんて浅ましい！」

「カノン！ ジュイネア様に何て事をいつのですかっ」

乾いた音が部屋に響いた。

カノンとよばれた侍女は、顔を真っ赤に染めて手をあげたスフィールを驚いた顔でみる。カノンはもつっていた水の入ったカップを年長の侍女に手渡し、申し訳ありません。と小さな声で頭を下げた。そして肩を震わせながら鋭い瞳でスフィールを見る。スフィールはその怒りのこもった瞳を向けられて、すこし後ずさる。

「ですがこの方は、私達に……いいえ。あらうことか姫さまにまでワケの分からない魔術をつかつたのです！！ 私には見えていました！ ジュイネア様がこの部屋に入ると同時に魔術を使つたのを！」

だからわたしはこの方を許しません、と泣きながら訴えるカノンにスフィールはどこか納得する。何故、彼に違和感を感じたのか。何故、すぐに警戒を解いてしまつたのか。何故、何も考えられなくなつてしまつたのか。

それらはすべて彼が発動した魔術のせいなのだと。

「そうなのですか、ジュイネア様」

スフィールがジュイネアに向き直ると、彼は困ったように肩をくすぐめた。

「何故私がそんなことをしなければならないのです？ そのただの侍女の言つことを信じるのですか？」

「彼女は魔術関係の家系だと聞いています。それなりに魔術を使うことができ、私自身も教えてもらつことがありますので彼女の言

「これは事実だと、わたしは思います」

怯える侍女たちを護るように金の髪の妖精は黒の魔術使いの前に立ちはだかった。それを見て彼は、あのねつとりとした嫌な視線をスフィールに向けた。どこか妖しい笑みを浮かべながら。

「お下がりくださいませ！ でなければ父上にこのことを報告させていただきますわ！！」

ジュイネアを指さして叫ぶと、それが外に聞こえたのか近衛兵の慌てた声が聞こえる。これで大丈夫であろうとホッとしていると、田の前の男はまるで悪魔のように高らかに笑いだした。不気味なモノをみた時のように顔が引きつるのを感じる。

「おとなしく我が妻になつていればよいものを……愚かな姫よ！ お前のような美しい純粹な人間は眞いのだがこの際は仕方がない、我が術をもつてお前に呪いをかけてやる！！」

「何を…！」

その言葉が口に出ることにはなかった。侍女たちの悲鳴が聞こえ、カノンにいたつてはジュイネアに向かつてナイフを突き付けようとしていた。必死に止めようと叫んでいたが、この声が彼女達に届くことは無かつた。

「姫さまを雌鹿にするなんて！ 正気じやないわ…！」

雌鹿？

スフィールはその場に固まつてカノンを見上げた。すでに彼女はジュイネアにナイフを取られ、身動きを封じられていた。何故、とつ

ぜん視界が低くなつたのか。何故、声が出なくなつたのか。それは
ジュイネアが言つた通り呪いをかけられたから？

「姫さまを戻しなさい！　この悪魔！！」

カノンが腕を振り回すが、そんな攻撃などへでもないように戦闘が
笑う。嫌な予感に背筋がぞくぞくとしたのを感じた。この悪魔を止
めなければ、そう思うのだが鹿の姿で何ができるだろうか。近衛兵
たちは魔術のかかつた扉を開けられるわけがなく、焦つたように扉
を叩いているのが聞こえた。

無力な私達はこれから起つてあるつ悲劇を絶望に満ちた瞳で待ち
受けるしかないのだろう。
物語にててくるように白馬に乗つた王子さまが姫を助けるなど、こ
の世にはあり得ないのだから。

「スファイール姫よ、お前一人では寂しからう。この愚かな侍女達も
お前と同じように呪いをかけてやるう」

悪魔の笑い声がひと際大きくなるのを聞いて、小さな雌鹿は意識を
手放したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5377z/>

王子と雌鹿

2011年12月20日20時52分発行